

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1090700038		
法人名	久建産業株式会社		
事業所名	グループホーム・アリス		
所在地	館林市羽附町699		
自己評価作成日	令和4年5月26日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構		
所在地	群馬県前橋市新前橋町13-12		
訪問調査日	令和4年6月10日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

アリスの「その人を知り望む生活を支える」という理念のもとにチームケアで利用者様に寄り添い支えられるような支援を心掛けています。
 また、食事摂取が困難となってきた方に対しても食べやすいもの、食べられるものの観察等行い経口摂取にこだわり身体機能の維持が出来るよう支援している。
 現状コロナ禍のため感染予防に重点を置き、利用者の危険回避に力を入れている。
 共同スペースが広く窓も大きいので太陽光も沢山入り明るさ心地よい空間で健康的な生活を送ることが出来ている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

家族や区長・民生委員との関わりを活かし、その意見をもとに月1回の災害対策訓練が継続して行われ、職員の災害対策への意識を高めている。また、地域との関わりがコロナ禍で制限されているが、閲覧板で地域の防災訓練の案内を得て、その参加を区長に相談するなど積極的に取り組んでいる。重度化になるなか、口から食事をとることが味覚・刺激、そして意欲向上につながることを大切に支援し、昨年度は4件の看取りを行っている。看取りでは家族との面会を例外的に認め最期まで関わりが継続できるように支援したり、法人が運営する小規模多機能型居宅介護事業所を活用して自宅で看取りをしたりなど、本人・家族に寄り添った支援が行われている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ある程度の理解は出来ているが、より深く実践に繋がれているとは言い切れない。時々理念について話す場を設ける必要性を感じている	管理者は、ケアプランに示す個別的な支援の実践に取り組むことが理念を体現するものであるという共有認識を図るべく、職員へ働きかけを行っている。その働きかけの方法、またパート職員への理解促進に向けたアプローチに取り組もうとしている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍ということで地域行事や施設行事が行えず交流の場がない状況である。状況が安定したらまた行事等再開し交流を図りたいと考えている。	コロナ禍により、これまでのような地域の祭りや事業所のイベントで直接顔を合わせる機会が減少したことで、「人とつながる・つきあい」の拡大がなくなると実感している。回覧版による情報から、地域の防災会議への参加を区長に相談し、今後防災から関わりを再開する予定である。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	事業所の運営に手一杯というのが現状で地域支援まで支援の幅を広げることは難しい。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	現在運営推進会議は書面での報告となっており一方での発信となっている。時折行政や包括より内容の確認やアドバイスがある程度。会議が再開出来るよう検討していきたい。	コロナ禍で会議が開催できずにいるが、事業所の活動状況などこれまで通りの資料を作成し、市へ報告している。過去には参加メンバーから地域の情報を得たり、活用したりした事例もあるが、会議開催の見通しがたかないなかでの関係づくりを模索している。	会議開催ができなくとも、参加メンバーに情報開示や参加メンバーの意見が表出されるような手段の検討を行い、実施するなかで、意見が運営に活かされることを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	事故報告書の連絡時にアドバイスをいただいたり、困難事例等の相談をすることが有る。	事故報告の際に、その対応や家族への報告などについてアドバイスをいただいている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的にチェック表を用いて自分の行動を振り返ることを実施。委員会の開催を実施している。転落防止等事故につながる場合のみ家族の同意を得て実施することもあるが、モニタリングを実施し拘束のない状態に戻す努力をしている。運営推進会議での報告実施	職員に対し、3ヶ月に1回「チェック表」にて身体拘束の有無について自己チェックを行い、「身体拘束とは何か」についての研鑽としている。拘束をしないよう話し合い、転落の恐れがある方には、利用者の発声があればすぐに職員が顔をみせ安心できるように居室替えを行うなど、不安を取り除く対応に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	定期的にチェック表を用いて自分の行動を振り返り、研修や委員会を開催し予防に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者以上の者の理解は有るが、介護職員の理解は乏しい。今後研修の実施を進めて行きたい。利用者様に関しては、必要とされる方への情報提供、提案、支援の実施、関係機関への情報提供を行っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	書面を提示し説明、疑問点はその都度説明し納得を得たうえで契約に繋げている。契約時に確認しながら実施。改定の際は書面で通知し不明点は確認していただける様示している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	聞き取りのほか施設玄関に意見箱の設置をしている。意見、不満、苦情等が上がった時は職員会議等で検討し改善点を見出し運営に反映させるよう努めている。	意見箱を設置している。面会ができるときには面会時や支払いに来所される方には来所時に、意見を聞くようにしている。週末に家族と過ごせるように自宅まで送迎をするなど、家族の要望に応える体制があるが、コロナ禍で中断している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日々のミーティングや定期的な会議の開催により意見や提案を受け反映させている。	月1回、出勤している職員で運営会議を行い、利用者の活動状況や職員体制などを踏まえて入浴時間を変更するなど、業務の流れに反映している。職員の適性や希望も踏まえて、法人内での勤務を調整しており、個別の相談には管理者・施設長で対応している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	職員の能力や希望に合わせた配置の実施勤務状態、能力を考慮したうえでの昇給を図っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	ケアの向上のためには今以上の研修を行っていく必要性を感じている。コロナ禍のため外部研修への参加が難しい状況のためリモートでの研修や、施設内研修を行っている		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍前は交流有ったが、現状難しい。時々電話での相談、情報共有に留まっている。今後再開できればと思っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	利用前での本人からの聞き取り等を行っていない。サービス開始後は本人の意思表示、訴えが可能な方に対しては傾聴し希望に沿ったサービス提供をと考えているが、難しい場面も多い。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	契約時、その後も対面や電話等で相談、報告は行っている。入所後も関係性が断ち切れないよう、不安が解消できるように努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談内容によっては、他サービスの提案も行っている。併設の小規模多機能のサービス利用の提案も行い合意ができた段階でサービス提供となっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	ケアを行う前に年長者であるということを念頭に置き関わるようにしている。出来ること、洗濯物たたみや食器拭きなど協力していただくことで社会の一員で有ることを感じ取っていただいている		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	連絡を密にとり施設内での様子の報告、一緒に本人を支える関係となる様努めている。協力してもらえる家族にはお願いしている。コロナ禍のため、以前より協力してもらった回数は減ってしまっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍であるため行えていない。以前のような友人、知人が面会や一緒に外出できるようになったら支援したいと思っている。	コロナ禍でこれまでのような友人等との関わりを継続することが難しいなか、居室に好みのカレンダーの写真を掲示するなど、直接的な関わりでない馴染みのものの継続を模索している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	席の配置などを利用者同士の関わり合いをもとに工夫しお互いが関わり合えるよう努めている。会話がしやすいような席の配置、他者とのコミュニケーションが図れ孤立しないよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後も相談事が有れば連絡いただけるようお声掛けはしているが、現状支援には繋がっていない		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	関わりの中から思いや意向の把握を心掛けている。現状に合わせた1日の過ごし方の把握に努め職員間で情報共有し支援に繋げている。	会話を通じて、「なにがしたいか」と漠然とした問いではなく、具体的に昔はどうだったか、なにが楽しいか、好きかなどを聞くようにして、意向を聴取している。聴取の方法については、他の職員の成功事例を共有することで、職員の引き出し(信頼関係構築のきっかけ)が増えることを期待している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人他家族からの聞き取りも行い生活歴の把握に努めている。フェースシートを活用などで生活環境やこれまでの様子等情報共有し把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	スタッフ間で申し送りや記録を用いて情報共有を行いその人に沿った総合的な状態の把握ができるよう努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	コロナ禍のため話し合いの場を設けることは難しい状況ではあるが、電話等で家族の意見の確認を行っている。状態の変化に即した介護計画作成を行い定期的なモニタリングの実施を行っている。	職員は利用者の日々の記録をし、その日のリーダーが記録の整理を行い業務日誌にまとめ、職員で情報を共有するようにしている。モニタリングは書式を変更して、項目ごとに月1回担当職員が行い、評価につながるようにしている。	職員は、介護計画の「具体的な内容」の支援を行っており記録をしているが、パート職員も含めた全職員が介護計画の目標を意識した支援と記録が行われることを期待したい。
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録、業務日誌、カンファレンスシートを活用し情報共有している。定期的なモニタリングを行い見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	以前は外泊や外出の支援も行っていたが現状は実施できておらず、柔軟な対応は出来ていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍のためボランティアの受け入れも見合わせ中であり地域資源等の活用はない。職員との関わりかたを工夫し暮らしを楽しんでいただけるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	通院が可能な方は支援している。体調悪化等により往診医への変更の検討、提案をし適切な医療が受けられるよう支援している。	事業所の協力医の往診が月2回あり、さまざまな診療科目に対応している。事業所に近い医院への通院は通院が可能であれば事業所でも対応しており、通院している方もいる。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	施設の看護師に常に利用者の状態把握をしてもらう他、変化が有るときには訪問看護師に相談したりし必要な医療が受けられるよう努めている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時に情報提供が行えるよう必要書類の準備。どの程度まで回復しているのか確認しどの段階で受け入れが可能か提示し連携を図ることで早期の退院に繋げている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所ですることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時にまず確認し書面に残す。次に身体状況の悪化した段階で再度確認。施設、往診医のフォローでどの段階まで支援が可能か家族に提示した上で支援している。	契約時、その後も意向を確認しながら、看取りを行っている。昨年度は、4名の看取りを行っており、最期は家族の面会や宿泊も受け入れ、本人・家族の意向を実践化するよう努力している。法人の小規模多機能型居宅介護事業所を活用し、自宅で看取った事例もある。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	職員の能力差もあるため全ての職員対象での研修は行っていない。常勤職員を主に研修実施。マニュアル作成し職員がいつでも確認できるよう対応している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎月第一週に自主訓練実施。年2回の消防署と連携しての訓練実施。コロナ前は隣接の工場や区長さんにも参加してもらい訓練を行っていた。	家族と民生委員の方の意見をうけて、毎月1回、水害訓練の他、AEDの使い方・救急救命などの自主訓練を行っている。年2回の消防署のもとでの訓練は夜間想定でも実施している。コロナ禍により地域の方をまきこんだ訓練は中断しているが、今後関わりを継続していきたいと考えている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	感情的にならないような声かけ、対応には注意している。年長者であることを常に頭に置き支援することを心掛けている。	年配者として敬う気持ちで接しており、時に感情的になってしまう場面などにおいては、対応する職員を変えて場面を切り替え、チームケアで行うことを指導している。本人に伝えてはいけない(話してはいけない)ことを職員に周知する等、対応に配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	意識して関わりを多く持ち、気持ちを伝えやすい関係性づくりに努め、本人の望む生活の支援が出来るよう心掛けている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	大まかな1日の流れは出来ているが一人ひとりのペースや希望に沿った支援ではなく介護者側のペースに近い。利用者の思う通りにしてしまうと寝たきりや廃用に繋がりそうな方も発生してしまうため配慮している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	今までは定期的に移動美容室の利用も行っていたが、現在は不定気を実施となっている。 衣類など好みのものを選び着ていただいたりすることは行ってもらっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	コロナ禍前は同テーブルで会話をしながらの食事を行っていたが、感染リスクをふまえたうえで、食事をしている。片づけに関しては、手指消毒実施の上で手伝ってもらっている。	食事は業者からの半調理品を活用している。コロナ禍で料理を作ることができないが、ボードにメニューを書いてお伝えする等、食事を楽しめるような取り組みを考えている。口から食事を摂ることは味覚、刺激、さらに意欲向上につながると考え、食形態を変えて提供している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	無理なく食事が摂れるように一人ひとりに合わせた大きさや柔らかさでの提供を行っている。水分も同様でゼリーに代替えしたり好みの物を提供する等で摂取量の確保をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自分で行える方の磨き方の観察をし、必要に応じ仕上げ磨きを実施。 義歯洗浄は介助している。夕食後は職員管理にて義歯洗浄剤使用。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄チェック表を活用しそれぞれの排泄パターンの把握。間が空くようなら声かけし促す。出来るだけ失敗を減らせるよう支援。失敗しても不快な状態を出来るだけ少なくできるように支援	おむつ利用であった利用者の「トイレで排泄したい」という思いから、便意・尿意がある時に声をかけてもらいトイレに誘導することでトイレでの排泄につなげている。また、排泄チェック表をもとに誘導し、失敗しておむつやパットがぬれてしまった状態がないようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	看護師と連携し取り組んでる。多めの水分摂取を促したり好みのものを出す等工夫している。運動や腹部マッサージなどその人に合った支援を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	曜日や時間帯の希望には添えていない。入浴には利用者の身体的負担も大きい。職員の手の有る時間帯(こちら側の都合)となっている。急変時対応出来るよう配慮。	1日おきに入浴を支援し、気持ちに配慮して、ひとやすみしてから入浴したいなど順番などに柔軟に対応している。寝る前に入浴したいという方には、入浴はできないが、代わりにホットタオルで身体を拭いてもらうことを提案し、希望があればそのように対応している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	特に制限は設けずにそれぞれのタイミングで休んでもらっている。ベット周りの環境も出来るだけ希望に添えるよう整えている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情は全職員が確認できる場所に保管している。変薬があった場合は業務日誌やミーティングで周知を図っている。スタッフにより理解度の差があるため理解している職員を1人/日以上配置している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナ前は外出行事やボランティアの来所等あり気分転換も図れていたが、施設内での簡単な行事のみではある。レクリエーションやゲームを行ったりし気分が沈み込まないよう努めている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため現状難しく支援できていない。落ち着いたたら再開できるようにしたいと感じている。	コロナ禍で外出ができないため、事業所玄関前でお茶を飲んだり、散歩をしたりして、解放感を味わえるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現状希望がないため持っている方はいない。 以前は自分で管理している方もいた。 希望があれば検討。欲しいものが有れば預かり金の範囲内で支援行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	携帯電話を持っている方も居るので自由に行っている方もいる。施設の電話をつなぐ支援はしている。 耳の遠い方など家族から手紙が届く方もいる。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室入り口にネームを貼り迷わないよう工夫をしている。一人ひとりに合わせ、安心して安全に動けるような環境づくりを行っている。	大きな窓からは明るい日射しがはいり、また車の動きなどもみえ利用者との会話の糸口にもなっている。トイレや居室などが戸惑うことがないように案内を表示し、車いすの方もわかるような位置にもしている。コロナ禍で外出ができないため、季節感のある飾りつけに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	席以外にソファや畳スペースを配置し席以外でも過ごせるよう工夫している。 現在コロナ禍のためパーテーションで仕切りをしているが席の配置で関係性が保たれるよう配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた物が有れば持参してもらったり、各利用者が動きやすい環境づくりをし、安心して過ごしてもらえよう工夫している。必要に応じてテレビの設置や寝具など家族に用意してもらっている。	テレビやタンスなどが持ち込まれ、利用者の状況にあわせて物の配置にも気を配っている。利用者との会話から、カレンダーの写真を飾るなど、居室づくりが行われている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりの設置や物の配置を工夫し動線の邪魔をなくすことで安心して生活できるよう工夫をしている。季節が感じ取れるよう室内装飾を心掛けている。車椅子でも不便なく自走にて動けるようスペースを確保している。		